

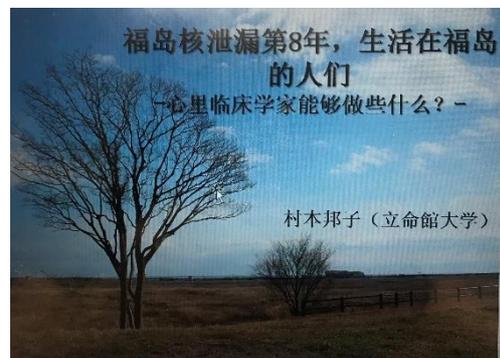
## 2016年むつ・多賀城・宮古

村本邦子（立命館大学）

この夏、2週間ほど中国に行っていた。南京の虐殺祈念館が毎年開催している「戦争と平和」学術会議にお招き頂いたのがきっかけで、上海、昆明と三都市を巡った。5年ぶりの中国は、ずいぶん観光客にやさしくなっていて、空気もきれいだし、タクシーも完全にメーター制になっていて、地下鉄も秩序立っており、物売りに囲まれるということもなかったし、もちろん地域によるのだろうが、扉のないトイレとも遭遇しなかった。逆に言えば、一時の、圧倒されて身動きできなくなりそうなほどのアグレッシブな中国のエネルギーは、少し陰ったのかもしれない。

昆明では、「アジア災害後心理支援カンファレンス」に参加し、福島の8年について報告した。雲南省という場所柄もあるのか、聴衆の大半がチェルノブイリを知らず、福島については、日本の食物への不安程度しかイメージがないようだった。福島の人々の生活の変化、それぞれに異なる価値観のもと、一人一人がそれぞれなりの仕方でも困難に対処し、悩み苦しみながらも精いっぱい生きていることを伝えたかった。そして、これは福島だけの問題ではないこと、中国でも世界のどこでも起こり得る問題であることを考えて欲しかった。福島の原発事故の背景には、日本の戦後処理の失敗があり、それに抵抗し続けている人々がいることも伝えたかった。

通訳付き2時間の枠で、どれほど伝わったかはわからない。でも、聴衆の姿勢は真剣そのものだったし、司会やコメントーターの先生方の表情にも高揚が見てとれた。言語レベルでのフィードバックはできなくても、なにがしかの思いが届いたと考えたい。今後、国内外で続けていかねばならないことを再確認した中国だった。



## 2016年度むつ

### 9月1日(木) むつ入り、懇親会

「東日本・家族応援プロジェクト」も6年目を迎え、後半期に入った。9月1日(木)、むつ入りし、例年通り17時から打ち合わせをし、18時からむつグランドホテルにて懇親会があった。

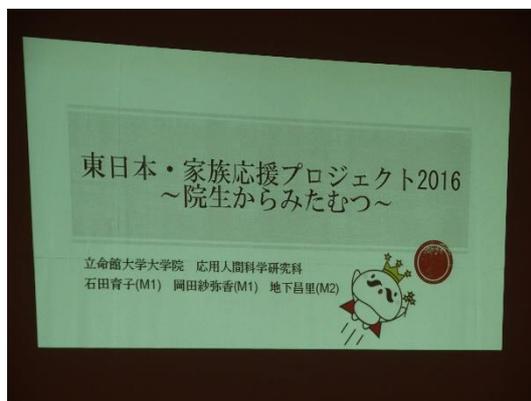
最初の児童相談所所長の挨拶で、現在、子どもの保護をめぐる両親からの訴訟を抱えていることが語られた。プロジェクト中も、スタッフの電話が鳴り、虐待通報やらDVやらの声が飛び交い、現場が動いているなかでのプロジェクト開催であることが実感された。

院生発表に刺激され、地元の方々によるふるさと自慢で盛り上がる。「まさかりガールズ」、山伏や恐山などスピリチュアルな側面、鉱山に恵まれた地質学的価値などについて語られ、青森ひばのお箸を頂いた。みなさんのむつへの愛が感じられる。

新しい公民館長は、このプロジェクトのことを大変に喜んでくれ、「むつには大学がないが、京都の大学が来てくれて、しかも、一方的に教えを乞うのではなく、下北の人たちと交流している。どんなもんだと鼻が高い。こんなことはこちらからお願いしても実現するものではない」と言ってくださった。私の方からも、地域の方々から暖かく迎えてもらい、院生はじめ一同感謝していることを伝えた。

途中、過去にスタッフをしてくださって、現在は転勤で遠方へ移動された方から祝電が入る。「今さらですが、あらためて東日本の家族応援なんだなと思っています」と。

何だか暖かい気持ちになる。



## 9月2日(金) 支援者支援セミナー、 児童相談所見学

今回の支援者支援セミナーでは、それぞれの地域の持つレジリエンスについてお話しした後、現地の方からの要望で、院生たちが事前学習したむつ市についてプレゼンした。初めての試みで、院生たちのプレッシャーも大きかったようだが、地域の方々に喜んでもらって自信を得ると同時に、自分の地域についてよく知らないことに気づき、地域の特性にも眼を向けて支援を考えるという視点を得るという意味でも勉強になったようである。

60人を超える参加者。まずはグループで自己紹介。自分の力、地域のレジリエンスについても一言ずつ紹介してもらおう。それから、いつものように、地元の事例を提供して頂く。今回は、性的な問題行動がある小学生を地域でどう支援するのかがテーマだった。

問題解決が難しい場合、どこにつなげばよいのかという社会資源についての情報、性的問題行動というラベルだけではないものの見方、困惑する家族への対応、性情報が氾濫する現代社会の問題など、さまざまな議論が行われた。正しい答があるわけではないが、さまざまな立場の人々と話し合うことで、視野が広がり、問題への理解が深まったことと思う。

アンケートには、「役職、年齢が違う人と会話・対話ができて、自分の考えとは違う考え方、意見を聞くことができ参考になった。他の人の視点の捉え方、考え方を今後活かしていきたい。」(20代女性)、「他の機関の考え方などを知り、とても参考にな



りました。」(30代男性)、「頭の運動になりました。いろいろな視点から学び気づくことができました。明日から役立てればと思います。」(50代女性)、「あのお父さんや当該生徒が誰かに出会えたり、何かに強い興味関心が抱けるような機会に遭遇できたらきっと変わった人生になっていたのではないかとつながり、物との出会いが大事。」(60代男性)。「事実からわかる事も色々な見方、考え方で相手を理解できる度合いが違うことが実感できました。」(60代女性)、「今日はとてもよい時間を過ごさせていただきました。学生さんのむつ市の紹介を聞き、あらためてむつ市の良さを知ることができました。事例についての話し合いでは、いろいろな意見が出て広い視野で考えることができました。助け合いができる地域・人との関わりがとても大切だと思います。これからもすみよい町であるように頑張っていきたいと思います。」(40代男性)など、たくさんの感想が書かれていた。

った建物ということで、一階が保健所、二階が見相、三階が社協となっていた。一時保護所は併設されておらず、事務室、医務室、相談室が2室、心理検査室、遊具治療室(箱庭あり)、プレイルーム(おもちゃ、絵本、遊具など)があった。



夜は、中央公民館で、お父さん応援セミナー。こちらは男性のみの参加なので、私たちは、その時間を利用して、新しくなった児童相談所を見学させて頂いた。警察だ

奥瀬次長と団さんの児童相談昔話で盛り上がり、院生たちが眼を丸くして聞き入っていた。貴重な勉強の機会になったことだろう。

その後、恒例の「美味小屋・蚕」で男性たちと合流し、食事しながら交流を深めた。

## 9月3日(土) 漫画トーク、反省会

図書館で漫画トーク。50名弱の参加者。アンケートには、「子どもの時、父親が家を出てゆき母に育てられました。本当にステキな男性と出会い、むつ市へ結婚するために引っ越して来ました。とても勉強になりました。」(30代女性)、「自分の今の現状にほんろうされることなく長いスパンでものごとを見ていけたらと思える講演でした。子育て中ですが、子どもが幸せだと思えるような育て方ができたらと思いました。一喜一憂をたくさんして。」(30代男性)、「十年も続けていかれることは素晴らしいと思います。“文化は辺境より生ずる”という精神で地域のみならず全国、全国にこの取り組みが広がり、皆がよりよい人生、地域が作れるよう、できることから実践していきたいと思います。立命館大学の皆様、今後とも御支援お願いします。」

(50代男性)、「今回初めて参加させていただきました。どうしても過去にこだわり、グズグズしている自分を反省です。次回も参加させて頂けたら幸いです。参加者が少ないことが気になります。私的にはこんなにいい事をもっと多くの皆さんに参加して聴いてもらったらいいのにと思いました。」(60代以上女性)、「今年も自分の関わ

る人たちや自分の家族のことも含めて、色々なことを考えさせられる時間でした。来年も楽しみにしています。」(30代女性)、など、たくさんの応援のメッセージがあり、なかには六回目の参加という方もあった。



漫画展の方にも、たくさんのアンケートとノートへのメッセージがあり、今回は中学生たちの声が届いていた。思春期の課題に直面するなかで、漫画展に何がしか励ましのメッセージを受け取ってくれているらしい。

「すごく活気で元気づけられます。自分の生き方をもう一度見直せます。」(中学生)、「今、僕は中学1年なのですが、夢中になって読んでしまいました。親から毎日、毎日、勉強しなさいと言われていたのですが、これが中々やる気が出ないんですよ。まあ仕方なくやっていますが…。いろんなことがあり、今の自分がここに居るんですね。はい。」(中1)、「変わらないものはないのだから、未来に希望を持とう。この言葉、胸の奥深くズッシリきました。いや、ひびきました。今僕はたまに中2病とか言われたり、そんな希望もありません。親から何か言われるとすぐに反抗してしまいます。そしてしまいには自分なんかこの世から居なくなればいいなんて思ってしまいます。でも、僕の周りにはそんな僕を大切にしてくれる人がいます。その人は、今年知り合ったばかりで、だいたい4ヶ月半ぐらいたってます。その人から支え、はげましの言葉をもらい、なんとか生きてます。しかし、“未来に希望を持とう”、この言葉には胸を大きくゆさぶられました。この言葉を胸に生きていったら、必ず楽しいことが待ちかまえているんだろうなと毎日思ってしまうんだろうなと今の僕は思います。本当に感動しました。またやって下さい！いつやるのか分かりませんが…。またやって下さい！絶対ですよ？」(中1のダメな僕より…)。



反省会では、この素晴らしい企画をどうやったらもっと多くの人に届けられるのか、漫画展を他の場所でも展開していかなど地元から積極的な意見が出され、とても励まされた。十年を迎えた時、何かが土地に根付き、いつの日か芽を出し何者かに育っていくことを期待して。



## 2016 年度多賀城

### 10月7日(金) 多賀城入り、交流会

宿にチェックインし、荷物を置いて、会場に向かう。今年の会場は、3月、駅前にオープンしたばかりの多賀城市立図書館（蔦屋）。ガラス張りで天井が高く、明るくきれいな図書館で、アクセスも良いので、たくさんの人々が入り出している。漫画展会場である3階のギャラリーには、センス良く工夫した漫画展の展示があって、感想ノートにも早速、いろいろなコメントが書かれていた。

夜の支援者交流会は焼き肉屋で、「においがつくので、きれいな服を着ない方がいい」と言われたが、きれいな服しか持っていないので、通り道にあったショップでわざわざきれいでないTシャツを買う。着替えて、皆と合流し、簡単な打ち合わせをして、指定の居酒屋へ。

新しい図書館でお世話をなさるスタッフの他、旧図書館のみなさん、おおぞら保育園の先生方が集まってくださり、再会を互いに喜ぶ。元図書館長は、図書館の移行でこの1年大変だったことを語る。蔦屋CCCは、紙媒体を使わない、個人用の机や荷物置き場がない、自由にどこでも使うといった先進的なビジネススタイルを取っているため、ギャップが大きかったようだ。

旧図書館スタッフは3名になったが、3万数千冊（中古本が1万数千冊）の新規購入選書をすべてチェックし、不適切なものは全て排除したという。「武雄図書館では不適切な本が多く、選書問題として批判されていたが、多賀城図書館ではおかしな本



は1冊もないはずだ」と力説されておられた。実用書の中古本購入については、刊行3年以内にするなど、基準を確立して実施したとのことだった。

CCCの独自配列（ライフスタイル配列）については、将来管理運営者の変更があったときにも対応できるように、3万冊の新規購入書と従来からあった本すべてに、CCCのライフスタイル配列の分類タグと標準的な配列の分類タグの両方を張りつけた。図書貸し出しによってTポイントがつく従来のシステムは適用しないようにするなど、さまざまな点で、図書館の運営方法についてはCCCと意見交換し、より良い運営になるよう努力を重ねたという。

図書館をより良いものとして存続させるために、ほとんど表には出ない形でこんなにも情熱を傾けて準備してオープンに到ったという経緯を知って、胸を打たれた。そんなことについても証人として存在したいものだ。

そして、「最初に引継ぎで念押ししたことは、このプロジェクトのことでした」と言ってくださった。「質を落とすことなく、思いをつなげ、必ず継続すること」と。蔦屋図書館はスタッフの移動が激しいそうで、今後、安定した運営をいかに維持できるかが課題になるが、新しい条件を最大限活かしてやっていけるよう、創造的に皆で知恵出ししていけたらと思う。





## 10月8日(土) 絵本と遊びのワークショップ、漫画トーク

今年、おおぞら保育園の先生や保護者の方々の協力を得て、鶴野先生との協働企画「絵本と遊びワークショップ」が実現した。オープンスペースになっている1階の絵本読み聞かせコーナーで、保育園の保護者による絵本読み聞かせや、参加者が昔やっていた遊びを紹介し合い、子どもたちと一緒にやってみるという試みだった。ベイゴマ、お手玉、手遊び、ゴム飛びなど懐かしい遊びに、子どもからお年寄りまで、世代を越えた楽しいひと時となった。自由度高くデザインされた温かみのあるスペースは、新図書館の強みだと思われた。

アンケートには、「絵本の読み語り心にごとございます。」「昔あそびに触れることが出来て、久しぶりに童心に戻れました。」「保育所の先生以外のスタッフのみなさんとコミュニケーションもとれて、特別な時間となりました。また機会があれば参加させていただきたいです。」「みんなで遊ぶ機会が少ないので楽しめました。」「孫と楽しく過ごせました。楽しかったです。」などの感想が書かれていた。





漫画トークは、3階ギャラリーの半分に椅子を置いて行われた。どうしても階が上がるにつれ人の出入りは少なくなるが、それでも、これまでよりたくさんの方が参加してくださった。「人には様々な人生がある。そして今も様々な人生を生きている。今だけ考えて、判断することはない。社会のシステムは変化していく。過去から、現在の歴史そして今は未来へ向かう、1ページであることを考えて今を生きることが大切ですね。」「“寄りそう”って言葉では簡単に言えるけど、本当に“寄りそう”ってむずかしいことだと思ってしまう。なぜなら木陰の物語1～4号にあったように、なぜ学校は4月から始まるのかとか、背の小さい順に並ぶのかに何の疑問ももたない自分には、世間一般の常識で様々な苦をもっている人に寄りそうということは、寄りそわれた人にとっては上から目線でしかないということがわかったからです。自分の価値認識を確認する2時間でした。」「将来、里親になりたいと思っており、夫もここで一緒に話を聞いてほしいと思いました。来年はぜひ一緒にここで聞きたいと思います。夫の名前は〇〇で、夫が私に澤田美喜の本を読むようプレゼントしてくれたことがあり、なんかつながっているなあと感じました。ありがとうございました。」など、詳しい背景はわからないが、それぞれに人生を深く考えるきっかけになったのではないかと思われた。

図書館企画の「トレジャーハンターは君だ！～図書館の謎解き探検」も子どもたちに大人気だった。



## 10月9日(日) フィールドワーク

3日目はおのおのフィールドワークとなっていて、私は、山形大学の上山真知子先生とランチをご一緒した。震災復興に関する最新の研究情報を交換しながら、楽しくおいしくフレンチを楽しんだ後、東北歴史博物館の特別展「日本人とクジラ」を見た。とても興味深い展示で、クジラとともに生きてきた人々のことを考えた。また、この日は、教育委員会が力を入れている万葉祭りの日でもあり、会場を見せて頂いた。日本最古の歌集「万葉集」の編者であった大伴家持をしのぶ祭りで、万葉衣装を身につけての万葉行列をはじめ、ステージでは笙の演奏や万葉踊りの披露、古代横笛の演奏、家持の歌の朗詠など行うのだという。多賀城は非常に歴史の長い都市だが、現在は仙台市のベッドタウンとなっており、新しい住民や若い人が多く、伝統をどのように伝えていくかは課題のようである。

## 2016年度宮古

### 11月4・5日(金・土) 花巻経由で宮古入り

今年は、教員3名、祭日となった3日に花巻に飛び、震災以降、東北に住み着いて心理支援を続けている河野暁子さんと合流し、狹鼻溪の舟下りを楽しむ。紅葉がきれいだった。この時期、台湾から花巻までの直行便が出ているとのことで、台湾の団体客が目立った。

夕飯を食べながら、情報交換する。大船渡は5年目に入り、「目立って落ちている」のだそうだ。訪問すると、死にたいというようなことを口にする人が増えた。アンケートでチェックされた人を保健師と一緒に回っているが、以前は、「あの時はそう書いたものの、今は元気です」と否定する人がほとんどだったが、「5階じゃあ、飛び降りても死ねませんね、アハハ」と、冗談めかして死を口にする。子どものグリーンワークも続けているが、外国のやり方は合わないと感じて、独自の取り組みをやっているそうだ。

夜は大沢温泉自炊部に泊まる。プロジェクト初年度、営業を兼ねて遠野からむつに旅した時には、大沢温泉のホテルに泊まったが、2014年に自炊部を試して、すっかりこちらが気に入った。温泉はもちろんのこと、レトロな建物が何とも言えずいいのだ。

翌朝9時に出発して、鉛温泉、山の神温泉、志戸平、台温泉と花巻温泉郷を巡り、宮古へに向かう。道中、JR山田線沿いの河川は、8月の台風10号の被害で、無残な状態だった。いったん開通した盛岡からの山

田線はまた長期運転休止になっていた。少しずつ復興に向けて努力しているなかでのこれでは、どんなにか力を奪われることだろう。



16時に浄土ヶ浜到着。観光施設が新しくなっていた。道の駅「なあど」に立ち寄り、漫画展を確認する。役所近くの更地だった辺りはすべて工事中で、すっかり様変わりし、海も見えない。宿に荷物を置き、院生たちと合流して、恒例のよし寿司で打ち合わせ。





## 11月5日(土) プロジェクト

宮古を訪れるのも4回目となるが、1年ごとに街中の変化を感じる。今年はこちら工事中で、大きな壁に海が見えなくなり、大きな車が行き交っていた。会場となった「シートピアなあど」の2階から外に出ると、おおらかな海に抱かれた船々、すがすがしい秋空を悠々と天がける鳥たちの姿があり、ようやく、「ああ、今年も宮古に来たな」と何だかホッとして、心身が緩む気がした。



漫画トークには、これまでプロジェクトを手伝ってくれていた多機能事業所すきっぷの職員さんが、現在産休中というなか、赤ちゃんを連れて駆けつけてくださった。アートで遊ぼうでは、すきっぷが宮古の四季をテーマにした貼り絵を用意してくれており、4グループに分かれて思い思いに作業をした。



顔なじみになった方々や、初参加のかわいい子どもたちがいた。3きょうだいの長女が懐いてくれて、おんぶしたり抱っこしたり、私も、久しぶりに子どもと触れ合う暖かさ、柔らかさを楽しませてもらった。「ちょうど震災前後に生まれたのではないかな。ご家族は大変だったろう」と思うが、子どもたちの振舞から、大切に育てられてきたことが伝わってきて、人の力はすごいなと感動するとともに、こんなふうに新しい命がつながっていくことに希望を感じて胸が熱くなった。



去年のセミナーで宮古の伝承をお話してくださった横道廣吉さん(NPO法人かわい元気社事務局長)が、今年も宮古にまつわる人物のお話をしてくださった。前は



話の内容が少し難しかったということの  
で、今回は挿絵つきだった。知り合いの漫  
画家に描いてもらったらしい。横道さん  
がセミナーに合わせて工夫をしてくださ  
ったことが有難かった。参加者にはアート  
で遊ぼうに参加してくれたすきっぷ利用  
者が多かったが、一生懸命挿絵を見て、途  
中楽しそうな笑顔も見られた。

それから、NPO 法人輝きの和の須賀原チ  
エ子さんと尾林星さんとの新しい出会い  
があった。須賀原さんは宮古に関する民話  
と絵本の読み聞かせを、星さんはオリジナ  
ルの歌と手作り紙芝居を披露してくれた。  
紙芝居「しろこじぞう」は昔話にある「白  
餅地藏」の宮古バージョンだという。お二  
人は宮古の魅力をユーモア交えて話して  
くれた。

今年の支援者支援セミナーは、中村正  
さんと一緒に担当した。出された事例や  
参加者の特性を踏まえながら、どのよう  
な形式で事例を検討するのがよいかずい  
ぶん悩んだが、事例提供者がパターンナ  
ルな支援についての問いかけをしていたの  
で、答えはひとつでないポリフォニック  
な視点が浮き上がるようにと工夫してみ  
た。

事例提供者からの説明の後、参加者は  
生活支援員、クライアント、その母親、  
職場の4グループに分かれ、それぞれの気  
持ちを話し合い、声にして全体で共有し  
た。次にファシリテーターが事例提供者  
にインタビューを行い、それを聞いて、  
またグループで話し合い、全体で共有し  
た。最後に事例提供者に感想を聞いた。  
ワークを通じて見えてきた世界は参加者  
の協働作業で生み出されたことを実感し



たが、参加者にとってもなにがしか役に  
立つものであればいいと思う。

夜は、Rojiという洒落た小料理屋で懇親  
会。「6年目の宮古はどうですか」と尋ね  
てみたが、先日の水害がこたえていると  
言う。市内は1階まで水に浸かり、3.11の  
津波で山の方に押し上げられた土が、今  
度は海の方（市内）に流れた感じだっ

た。市内は家の中まで泥でドロドロになった。まだ所々土が残っているところがある。本当に大変だった。避難しろと言われても、どこに逃げたらいいか分からなかった。津波のときは高台に逃げたが、山からは土も水も流れてきた。津波で水に浸かったところと同じところが水に浸かった。「ようやくここまで」というのがまた元に戻って、もう力が出ない。光景があの時と同じで、フラッシュバックして辛くなった人々も少なくなかったとのことだった。

スタッフのお一人は、3.11の被災時の話を語られた。これまでも少しずつ聞かせてもらっていたが、今回、また初めて聞かせて頂く話だった。一人一人の心中には、きっとまだまだたくさんの物語と思いが眠っているのだろう。



## 11月6日(日) フィールドワーク

毎年恒例のフィールドワークで、沿岸部被災地を訪ねる。まずは、三度目となる田老の「学ぶ防災」。定点から見る風景とガイドの語りの変化に1年という時間の流れを感じる。防潮堤の建設が急ピッチで進んでいるが、一年に一度だけ訪れる私たちにとっても、こうして海が見えなくなっていくのを見るのは暗い衝撃である。地元の人々の思いはいかほどだろう。

当時の第1・2・3防潮堤が交わっている地点で、震災当時の説明を聞く。東日本大震災時、最大津波は16mに及び、田老地区では1691戸が被害をうけ、181名が亡くなり、41名がいまだに行方不明。この地区は津波の被害が繰り返されてきたので、防災意識は高かった。道も碁盤の目につられており、避難道路も整備されていた。地震から津波が来るまでに45分あり、避難道路を使い過信せず避難をしていれば助かっていた命が多かった。大丈夫だろうという油断が被害を大きくした。また、防潮堤の中で、津波が来ていることに気づくことが遅れた。

防潮堤があったことで、残ったものがある。昭和の大津波以降、第一防潮堤の内側には家を建ててよくて、外側には建ててはいけないと言われていた。しかし人口の増加や核家族化の影響で敷地が足りなくなったり、漁師は海の近くに家を望んだりしたこともあり、いつしか建ててはいけないと言われていたところにも家が建てられるようになった。

結果的に、第一防潮堤の内側に家があったところは亡くなった方の遺体が発見さ

れ、外側に家があったところで亡くなった方はいまだ発見されていない方が多いという。最後にお別れができた人とできなかつた人とは、今も心のありようが違う。元職場の同僚は、出張前日、妻子を実家に預けにきて、家族全員失ったという。その家はたろう観光ホテルの裏にあって、津波が引いた後も家が残った。まだ子どもだけが見つからない。

田老は昔から津波が多く、海と共に生きていくための防災教育が行われてきた。地震が起きたら逃げなさい。自分の命は自分で守りなさい。生きていたら必ずまた家族に会える。「つなみてんでんこ」である。津波の前には海の水が引くのに、引かなかった。防潮堤があることで、津波の押し寄せる音にも気づかなかった。

漁師は津波が来ると、船を守るために沖に船を出す。今回は、船が波で押し戻されて、なかなか沖に出られなかった。ある漁師の親子は、それぞれ船を沖に出そうと船に向かったところで出会った。どちらかは絶対に生き残らないといけないと、息子は父親に懇願して船から下した。父親は、船が沖に出るまで海岸近くで見守ってから避難すると言ってきた。しかし船が沖に出るまでに時間がかかり、父親は結果的に逃げ遅れてしまった。

当日は消防団が住民を避難させようと頑張っていた。ある消防団の親子は消防団の待機所で避難放送をかけていたが、そこで被害に遭い、まだ見つからない。水門を閉めに行った消防署の人たちも、消防車に乗ったまま津波で流されてしまった。消防車の中からは津波が見えなかったのだろう。





田老防潮堤もあったし、津波到達まで 45 分あったのに、181 名という人的被害を出し、メディアでは「逃げ遅れた町」と報道されたが、田老の人々は決して逃げ遅れたわけではなかった。誤解しないでほしいし、誤解されないように自分も伝えていかなければいけないと思っている。確かに防潮堤やこれまでの小さい津波から津波に対する油断もあって、逃げなかった人がいることは否定できない。しかし逃げた人でも、結果的に高さが足りなくて津波に飲み込まれてしまった人も大勢いたし、逃げた後に寒いからと上着を取りに戻って飲み込まれてしまった人もいた。

今回は、津波が防潮堤の向こうから押し寄せる映像を田老観光ホテルの 6 階から撮ったビデオをその現場で見た。去年もおと

としも見たビデオだが、窓の外に見える穏やかな海と重ねながらその映像を見ると、あらたな戦慄を感じる。

ガイドは、防潮堤はあくまで津波到達までの時間稼ぎであること、周りの判断に任せないことを強調した。周りが逃げていなくても、結果的に命が助かればいいのだから逃げるのが大事。普段から防災を意識しておくこと。災害は津波に限らない。自分自身も、「津波が来ても大丈夫」と思っていたが、この間の台風 10 号の時はどこに逃げたらいいか、どうしたらいいかわからなかった。

とくに独り暮らしの大学生は、一人で家にいるときに災害に遭うことが統計的に多いとのこと。一人でいる時、どこかに出かけた時、災害に遭ったらどうやって逃げるかを常に考えてほしいと院生たちに強く訴えた。「私も、いつも車を頭から停めるのに、あの日だけは、バックで停めていた。いつものように停めていたら、今日、皆さんとお会いすることは出来なかった。」

それから、昭和 9 年 3 月に建てられた「大海嘯記念碑」を見に行ったら、「大地震の後には津波が来る。地震があったら此処へ来て一時間我慢せ。津波に襲われたら何処でも此の位高いところに逃げろ。遠くへ逃げては津波に追付かる。常に高いところを用意しておけ」と刻まれてある。

道の駅に寄り、オデンセを見た後、大槌町の復興きりり商店街へ向かう。去年はまだ道路整備中だったが、一変して住宅に囲まれた商店街になっていた。客層も、去年は作業服を着た人ばかりだったが、今年は家族連れが多く見られた。こうやって町は復興に向かっているのだと思った。2018 年



には商店街は閉じられるとのこと、その後は復興後の日常が形成されていくということだろうか。

昼食を取り、いつものように城山公園へ上る。定点（希望の灯り）からの風景は、あまり変わっていないように見えたが、道路と区画の整備がなされた印象であった。来年には、建物が建てられているのだろうか。

最後に、遠野の語り部としてご活躍の大平悦子さんのご自宅にお邪魔し、民話語りを聴かせて頂いた。数年前に移築し、藁ぶき屋根を葺いたという古民家の囲炉裏端で、大平さんが作ってくださった南瓜入りぜんざいや果物を頂きながら、『遠野物語』のオクナイサマや「猫の浄瑠璃」、「豆腐と

コンニャク」をはじめ、遠野に伝わる昔話を語って下さった。パチパチと暖炉の火が音を立て、煙が目に染みるなか、ゆったりとした遠野弁で昔話を聞くのは最高の贅沢だと思った。宮古のプロジェクトは、いつも秋の景色が美しい。



つづく